

最優秀賞

私が考える和歌山の未来について

和歌山県立向陽中学校 二年

近藤 颯祐

大阪・関西万博には、様々な最先端技術があった。例えば、ips心臓や人間洗濯機、空飛ぶクルマなどだ。そんな数々の魅力的なパビリオンの中でも、私が特に感銘を受けたのが「NTTパビリオン」のことだった。NTTパビリオンでは次世代型情報通信基盤「IOWN（アイオン）」を活用し、離れたところや人と感覚を共有するという体験をした。私はこの技術が和歌山の課題を解決してくれるだろうと思った。

和歌山県は紀伊山地の靈峰と黒潮が通る豊かな海に囲まれ、まさに「自然の宝庫」である。しかし、今和歌山は人口減少、高齢化そして地域産業の活力低下という課題に直面している。私が思い描く和歌山というものは今のように自然に囲まれた地でありながら、情報技術の最先端を走るというものだ。

和歌山のポテンシャルはずばり、数々の山々と豊かな産物や魚介を生み出す土壤にある。しかし、和歌山はこのポテンシャルをあまり引き出せていないと私は考える。その最大の原因は「情報の伝達速度・体験の共有」にある。この原因を打ち碎くのがNTTパビリオンの技術だ。

それを踏まえ私は、和歌山の未来について大切なことは「デジタルネイチャー」の実現だと考えた。デジタルネイチャーとは万博のシグネチャー・パビリオンをプロデュースした筑波大学准教授の落合陽一氏が提唱した概念で、その意味は「コンピューターと人間、自然が一体化し、従来の「自然」と「人工」の境界が消えた状態、またはそれを実現する新しい「自然観・世界観」である。これは、NTTの技術を和歌山の紀州材の森、みかん畠、そして黒潮の地域にこそ適用し、全ての自然環境にセンサーとAIを導入し、生育状況、土壌水分、漁獲資源の動きを

リアルタイムでデジタル空間に再現することである。

仮にこれが実現した場合、まず、第一次産業の効率と魅力が劇的に向上する。熟練農家の「感覺」で行われてきた栽培管理がデータ化され、若い世代でも高品質な農作物を安定して生産できるようになる。これにより、地域産業の担い手不足を解消し、農業や漁業の未来志向をスマート産業へ変革できる。遠く離れた場所でも、ベテラン漁師の技術や知識を「超感覺」的に共有し、継承することが可能になるのだ。

私は、和歌山の未来は輝かしいものであつてほしいと心から思っている。そのためにはやはり時代の最先端技術を生かしていく必要がある。この情熱を胸に、私は和歌山の魅力を未来技術で磨き上げ、世界中の人々が「住みたい、訪れたい、いつか帰りたい」と憧れるそんな和歌山を作つていきたい。